

## 「縁は異なるもの - 数理経済学との出会い」

梶井厚志

数理経済学の専門誌の編集長をしていた関係で、この10年ほどは、専門分野は何かと聞かれたら数理経済学と答えることにしている。とはいえ、もしも数理経済学とは何かとさらに問われると、実は適切な答えが分からない。しいて言えば、数学を言葉として用いて経済を語る分野である。しかし、経済学の分野といえば、労働経済学であるとか、国際経済学であるとか、その分析の対象で分類するのが通例だ。数理経済学はその意味での分野とはいえない。

数理経済学というと、高度で難解な数学を駆使する分野と思われがちだ。言葉として使う数学は高度であったり難解であったりする必要はない。ゼミでも数理経済学を看板にあげているが、学生たちはお世辞にも数学をよく分かっているとはいえない。数学が好きそうでもない。おそらく数学は不得意なのだろうと思う。それでも、立ち向かえる数理経済学の問題はあるから面白い。

私が数理経済学と出会ったのは大学1年の時だ。ただし、自分の興味と意思ではなく、少なからぬ誤解と偶然に導かれて出会ったのである。

大学入学時の私は、マルクスに傾倒していた。これは受験勉強への疑問に端を発し、社会の変革なくして幸福などあり得ないという子供じみた理想主義的願望を、当時の私が持っていたからだ。社会変革のために大学では大いにマルクスの革命思想を研究したい。それで、大学に合格した後、入学前に準備を十分しておきたいが、実際はマルクス理論のことなど何も知らない。マルクスを学ぶならまず『資本論』を読まねばならないという。そこで、これを読破しておこうと私は考えたのである。

しかし、読み始めると全く理解できず困った。だがこれはいきなりマルクスにとりかかったのが悪い。マルクス経済学の中核をなす労働価値説は、それがそれが前提とする哲学を習得しておかなければ理解できないのだと私は診断し、哲学の本を先に読むことにした。まず手始めにマルクスがさかんに引用するフォイエルバッハの岩波文庫にとりかかったが、全くわからず即座に挫折した。これを理解するにはさらにその前提を知らねばならぬと、さらに時代をさかのぼってヘーゲルやカントの本を手にとったが、これらはどうてい人間の言葉とは思われなかった。

入学式を過ぎ、履修要綱に“Theory of Value”という英語の本を読むという少人数講義を発見したのは、自分にマルクス研究ができるのかと疑問を持ち始めた時だった。書店で見たその本には、奇怪な記号や図がいくつも書かれている。だが、長大な資本論や哲学書に比べれば、英語とはいえこの本はわずかに100ページほどしかなく、とても薄いのが気に入った。著者のDebreuという人は聞いたことがなかったが、ここで労働価値(value)の真理(theory)を手早く教わることができると直観し、私はこの講義を履修したのである。

その講義を担当したのは数学の教授で、学生は私一人だけだった。講義といっても、この本を自分で解説し説明してみろというだけだ。予想に反して、教授は全く教えてくれない。説明が間違っていると、それは誤りだと指摘されるのだが、では何が正しいかは教えてはくれず、自分でもう一週間考えてこいというのである。そんなやり方だから、私は毎回すぐに行き詰まった。すると、では来週続きをやりましょうと教授は切り上げてしまうから、90分の授業時間がいつも1時間もたたずに終わった。

さらに予想外だったのは、この本の第1章は、分析に使う数学知識のまとめだったことだ。いきなりn次元空間とか点列の収束などとさらりと書いてある。教授によれば、この第1章を突破できないようでは2章以降の本題には入れないという。だが、私には抽象的な数学の知識は一切なく、n次元だって点列の収束だってなんだかわからない。しかも教授も教えてくれないものだから、読解は遅々として進まない。第1章の7割ほどを学ぶのに1年かかり、2章以降は学ぶどころか手も付けられなかった。労働価値の真理に到達するどころか出発さえしなかったのである。

さて、実は著者の Debreu は数理経済学の創始者ともいえる人物で、私がこの本の第1章と格闘した翌年の1983年にノーベル経済学賞を受賞した。もちろん、この本の2章以降もマルクスとは違うようだと、私はとっくに気づいてはいたのだが、そんな偉大な人が書いた本だとは思ってもよらなかった。自分は数理経済学の端緒にいたのに気づいてはいなかったのである。この本は労働価値説など相手にもせずに、価値は市場の需給で決まるものだと教える。もっとも、この本の残りの部分が理解できるようになったのは、それからさらに数年後のことであつたが。

2年生になっても、私のマルクス・哲学熱はさめていなかった。1年生のときには、ドイツ哲学やギリシャ哲学の本を読みあさり、2年になるころにはイギリスの哲学や倫理学に凝っていた。それで今度は、アダム・スミスの倫理学を勉強するという少人数講義に参加してみた。こちらにはたくさん学生がいて、しかも女子学生まで何人かいて楽しそうだった。しかし、こちらの講義は原書を訳すだけだ。初版本だかなんだか忘れたが、とにかく本物の貴重な本をめくって、精神的にも物質的にもアダム・スミスに触れるのが学問だと、教授は悦にいて学生に語るから驚いた。大学1年目に哲学と抽象数学の勉強以外には麻雀しかしなかった私には、この担当教授が語る事が軽薄なでたらめに聞こえてしかたがない。結局、2回出席しただけでやめた。

しかし、単位が確実にもらえる少人数講義を履修しないのは痛い。幸いにも履修届の変更が可能だったが、期限が迫っていてすぐに決着をつけなければならない。学務課で情報を確認すると、目をつけていたのはどれもすでに定員一杯になっている。しかしよく見ると、例の数学教授も開講しておりまだ空きがある。履修要綱をみると、今年は鈴木光男著『ゲーム理論入門』という本を読むという。前年のことがあったから躊躇したが、時間がない。もとよりゲームや勝負事は大好きだし、入門の本なら大丈夫だろうと考え、私は履修登録したのである。

翌週教室に行くと、学生はまたしても私一人だけだった。入門といっても、予想に反し、手ごたえは十分以上にある本だった。私が読解し、教授が教えてくれないのは、予想通りだった。2年次も再び私は教授との濃厚な1年間を過ごしたのである。

思えば Debreu の本をろくに読まずに労働価値説の解説書だと勘違いしたのが、数理経済学との縁の始まりだった。また、分からない問題に直面しても、いろいろと考え自分で結果をひねり出す習慣と技術を学んだのは、この教授からだった。教えてもらえなかったのに、なぜか抽象数学に強くなった。この教授との不思議な縁がなければ、私は学者にならなかつただろう。